

あなただけプロデュース Part.1

おくら

(一九九〇年)

〔一〕昭和三十四年・夏

ザ・ピーナッツの『可愛い花』聞こえてくる。

舞台奥の“昭和三十四年八月十四日”の日めぐりに明かり入り、軒下の風鈴、ちりりんと鳴る。

明かり、ゆっくり広がると、中庭が見えてくる。

猫の額ほどの中庭で、奥の方は、空き地。

中庭と室内を仕切つてあるガラス戸に、花柄のハンカチ

チーフが、洗濯して張りつけてある。

さらに、明かり広がると店内が見えてきた。

客用のテーブルと椅子。

上手のやや奥は、だんご作りの仕事場で、その奥に台所があるが、これは見えない。

そして、中庭をはさんで、下手は、座敷。

襖は開けてあるが、中は見えない。

店のひとつのテーブルの脇の台の上で、扇風機が、コトコトと音をたてながら風を送っている。

テーブルにうつ伏して、女の子がうたた寝をしている。

女の子の細っこいリボンが風で揺れている。

テーブルの上には、氷イチゴのカップと、教科書とノート。

門前町の通りに面した入口のガラス戸に“八月十四、十五、十六日、お盆休みとさせていただきます。店主”の張り紙。

セミの音がする。

振り子の柱時計、じょーん、じょーんと二時を打つ。

女の子、目を醒ます。

“さくら”という名で、十二歳。

さくら、首のあたりに、じわつとした汗を拭い、目をこする。

テーブルの上にひろげられてた教科書に目をおとすと、教科書のすみっこが、涎でふやけているのを発見。

慌てて指でそつとこすり、ページを扇風機で乾かす。

風は、さくらの前髪も一緒にそよそよさせる・・ああ、

いい気持ち。

ト、ひとりの男が、中庭からひよっこりあらわれる。

男は、二十六歳である。

黒メガネをかけている。

ダブルの夏物の背広を着て、カバンをさげている。

黒メガネだけが、妙に目立ち、男自身もかけていて気になっっているふうが欲しい。

さくらは男の出現には気づかず、風にそよそよと吹かれています。

男、店の中を覗き込み、さくらに目がとまった。

そして、あ……となって、じいっと見つめた。

さくら、男の視線を感じて振り向く。

ギョツ……こわい。

男 (とりつくろうように) お店お休み……ですか？

さくら ……は、はい。

男 そうか。休みねえ……お盆だもんなあ。

さくら ……あ、あの……なにか御用ですか？

男 おいちや……おじさんもおばさんも、いないんですか？

さくら はい。しょ、商店街の人と一緒に、船橋ヘルスセンターにいつてます。

男 あ、そう。やれやれ。(ト、入ってくる)

さくら (ギョツとして後ずさる)

男 暑いねえ。(ト、シャツをパタパタさせ、椅子に座って

しまう)

さくら は・・・はい。

男 (氷イチゴのスプーンをカランとやって) 喰っちゃったのね、おねえちゃん。

さくら は？

男 いや、いいの、いいの。ベロ、まっかになるのよね、コレ。ああ、暑い、暑い。(シャツ、パタパタ)

さくら、恐る恐る、扇風機をまわしてあげる。

男 ああ、ありがとう。おねえちゃんは優しいねえ。

さくら あ・・・あの・・・

男 っー？

さくら おじさんとおばさんは、今日は帰らないんですけど。

男 泊まりかい？

さくら はい。一泊。

男 っー。(テーブルの上をひよいと覗き込み) お勉強？
偉いねえ。お、英語だね。(ト、教科書に手を伸ばす)

さくら (教科書をかきあつめ、ジロツと男を見る)

男 ？・・・どしたの？・・・ああ、コレ(黒メガネ)？ こわい？・・・こわいかなあ。・・・でも、マッカーサーだっかけてたよ。やっぱ、こわいか。・・・ねえ、おねえちゃん、オジサン、決して悪い人じゃないんだよ。そりゃ、おねえちゃんのようなカタギのひとには、こわい人に見

えるかもしれないけどさ。俺、なんか、怖いことした？
してないでしょう。ね。そりゃさ、自分で自分のこと悪
い奴だなんていう悪人は、この世にいるわけないって、
おねえちゃんが思うのもわかるよ。うん、よくわかる。
けどさ、オジサンは、ほんとにほんと、真正正銘、悪い
人じゃないのよ。コレ（黒メガネ）はワケあつての・
深くい、深くいワケあつてさ・・・ま、このような次第
です。で、水一杯、もらえますか。

ぼかんと聞いていたさくら、ハッと我にかえって、奥の
流しにとんでいく。

ジャーツと水が出る音とする。

男

（覗き込んで）暫く出しといてからコップに入れてちょ
うだよ。この暑さだからね、最初のうちはお湯だよ、
お湯。

さくら、出てきてコップをテーブルに置く。

男

ありがとう。（ト、一口飲み）くうつ、生き返るねえ。

さくら、つつたつて見てる。

男

（また、一口飲み）あー。（さくらに気付き）気にしな

いで勉強しなさい。ね。

さくら (すわって教科書をひろげる)

男、くつろいでいる。

さくらは、鉛筆をとって、勉強をはじめたが、男の存在が気になる。

男は、懐かしそうに店の中を眺めている。

さくら、気になる。

男
なに？

さくら
いえ……。 (鉛筆をかまえる)

男、のっそりと立ち上がって、柱のキズを見てみたり、西の市のくまでをさわったりしている。

さくら、どうしても落ち着かない。

男
ん？ どうかした？

さくら
あのお、どちらさまでしょうか。

男
どちら様ってほどのもんでもないけどさ……。けど、偉いね“どちら様”なんて言葉を知ってるのねえ、おねえ
ちゃんは。学校でならったの？

さくら
そじゃないと思うけど……。

男
ま、気にしないで。ね。気にしないで勉強しなさいよね。邪魔しないから。

さくら

はい……。

男

(また、店の中を眺めて) そっかぁ……(ト、独り言)

さくら、ちらと見るが、勉強する。

男、さくらを振り返る。が、勉強してるので

男

(少し大きめの声になって) なるほどねえ。(ト、ちらと、さくらを見る)

さくら、勉強してる。

男

(椅子に座って) ふうん。(ト、指先でテーブルをリズミカルに、スツタカタンノスツタンタンみたいに叩く)

さくら、ちらっと上目で見るが、気にしない。

男の指ダンス、派手になる。

さくら

あの！

男

(待ってましたとばかり) なに？

さくら

おじさんかおばさんに、ご用でしたら、今日は帰らないんです。さつきも言ったけど。

男

うん、さつき聞いた。

さくら

……。(口をとがらせて、再び勉強)

男、口をとがらせたさくらが可愛い。

で、思わず真似をする。 が、さくらは気づいてくれない。 で、見せようとするが、さくらは見ない。

男の“見せたい心”募り、下をむいて勉強してるさくらを覗き込み、キスを求めているみたいな恰好になってしま
う。

さくら (気付いて) わッ!

さくら、椅子からとびあがり、おびえる。

男 (大慌て) ち、ちがうのッ、ちがうんだよッ。

さくら、だんぜん、おびえている。

男 (マゴマゴ) あ・・あの、こ、これ、読んでみてくれな

い。(ト、英語の教科書をさしだす)

さくら え?

男 こ、これ。読んで聞かせてよ。ね。

さくら ・・・・・。

男 ね。ね。

さくら (恐る恐る戻ってきて、教科書を受け取る。ページ開く
が) 下手だから・・。

男 ーの、ーの。

さくら (読もうとするが、妙に緊張) ほんとに下手だから。

男 いいんだって。

さくら (セキバライ)・・・ジエ、ジェーン・・・。

男 (即)おッ、ジェーンか。

さくら え?・・・知ってるんですか?

男 ああ。ジェーンってのは、アレだろ。ターザンのコレ

(小指)。

さくら は?

男 ジェーンがどうしたって?

さくら はい・・・あの・・・ジェーンライクステニース。

男 なに?ストライク?

さくら いえ。ジェーンライクステニスです。

男 テニス?ってえとアレかい。外国のはねつき。

さくら はあ・・・。

男 はねつきにもストライクなんてあるのかい?

さくら いえ、ストライクじゃなくて、ライクス。好きって意味

です。ジェーンライクステニスで、ジェーンはテニスが

好きですって意味になるんです。

男 ふうん・・・で?

さくら で?って?

男 続けてちょうだいよ。

さくら ・・はい。ジェーン・・・

男 待てッ。

さくら はい?

男 ・・ジャングルではねつきをするのかい？

さくら え？ジャングル？

男 ジャングルじゃはねつきはできないだろうよ。あっちの木こっちの木にひっかかっちゃうだろによ。いや待て。

ひよつとすると、こりや、まだターザンと知り合う前の

話かもしれないな（教科書を覗いて）あーまだガキだ。

ふうん、ジェーンのご幼少の頃の話なんだな、こりや。

（ト、ひとりで納得し）続けて。

さくら テッドライクステニース、ツー。（ちらっと見る）

男 ふむふむ。

さくら ドウユーハブ、ア、ラケット、テッド？

男 ふむふむ。

さくら イエース、アイハブ・・・

男 ・・ハブはこわいよねえ・・・

さくら え？

男 ぬるって出てきて、がばッてやられた日にゃ（しびれる

動作）だものなー。

さくら （無然として）あの、宿題やっていいですか。

男 どーぞどーぞ。

さくら （鉛筆を取って、書き出す）

男 （覗き込んで）なに？これ？

さくら 作文です。

男 へ？ 英語で綴り方書いてんの？

さくら 宿題だから。夏休みの。

男
へー、たいしたもんだねえ（感心）。ね、なんて書いてあるのさ。読んできかせてよ。

さくら
（なんとなく嫌だが）ア・・アイアム、ジャパニーズガール。

男
ふうん・・。

さくら
わたしは日本の少女ですって意味です。

男
そりやそうだわな。みりやわかるよ。

さくら
（読もうとして）あの・・ここからが、ちょっとへんなんですけど。

男
そうなの？

さくら
デイスイズアペン。デイスイズアンアプル。ドゥユーハブアペン？イエス、アイハブ・・これはペンです。これはリングゴです。あなたはペンを持っていますか。はい、わたしは持っています・・。

男
それ・・作文かい？普通作文ってのは、わたしのおとうさんはヤスオで、おかあさんはマサコで、ふたりあわせてヤンマーですとかそういうことを書くんじゃないのかい？

さくら
・・あたし・・おとうさんもおかあさんもないから。

男
・・・。

さくら
・・・。

男
ま・・まあ、いいやね。いいやいいや・・しつかし、暑いねえ。扇風機かかっても暑いよね。なまあつたかい
空気、かきませてるだけでもんな。このへん（お腹）は

多少、汗ひいたけどさ、ここいら（首）は、びっしりだもん。汗が下へ、たらありたらありって流れてくる。

さくら、立ち上がってゴソゴソやり出す。

男
なにやってんの？

さくら
何か台になるもの……。

男
？

さくら、海苔の缶を取り出してきて、その上に扇風機をのせる。

さくら
上の方にいきます？ 風。

男
……やさしいねえ……。

さくら
（照れて）サンヨーから、でてるんだけど……。

男
え？

さくら
高さが調節できる扇風機。でも、一万二千八百円もするんです。

男
へー、そんなにするの。

さくら
はい。

男
そうかい、そんなに高いのかい。（咳く）買えねえよなあ、この家じゃ。

さくら
（明るく）そうなのッ。だって、自動炊飯器だっ
てないんだもの。（ケラケラと笑う）

男

・・・。

さくら

東芝の一・一リットル炊き、三千二百円。ふふふ。

男

・・そ、そうだよな、買えっこねえよ。そんなもん、買えねえのが普通つてもんだ。ハハハ。

さくら

でもね、オジサン。あと何十年かしたら、家中、みーんな電気になるんですって。

男

へー。

さくら

冷蔵庫でしょ、洗濯機でしょ・・・

男

金持ちの家だけでしょ。

さくら

そかもしれないけど、でも、あたしがお嫁さんに行く時には、ひとつくらい、最新型の電気もっていききたいなあと思うの。

男

・・金持ちと結婚したいのかい？

さくら

そじゃないけど・・・あのね、あたし決めてるの。

男

何を？

さくら

ひとつだけ電気もってくんだったら、テレビがいいなつて。

男

テレビ？

さくら

そう。だって、他のものは今のでまにあうけど、テレビはダメでしょ。テレビがあれば、お夕飯たべながら“バス通り裏”見られるし。皇太子様の御成婚のパレード、あたし、駅前の電気屋さんまで見にいったよ。やっぱり、テレビが一番だなあ。自動炊飯器なんて、いらないわ。お釜で充分よ。ねえ、オジサン、自動炊飯器って、

おこげができないんですってよ。

男 ふーん、そうなの。

さくら つーまんないよねえ。あたし、おこげ大好きなの。オジサンは？

男 オジサンも好き。

さくら あたしなんか、ちゃんとした御飯よか好きよお。(ケラケラ笑う)

男、ほのぼのとさくらを眺めてしまう。

さくら (気づいて)・・・お、おべんきよ、しよっと。

男 ・・・そうだね・・・。

さくら ・・・あの・・・おじさんかおばさんの知り合いの人ですか？

男 え・・・いや・・・ま・・・そうかな・・・。

さくら はあ・・・。

男 あ・・・そろそろ、おいとま・・・しようかな・・・。

さくら あ、そうですか。どうもおかまいもしませんで。(ト、立ち、ニコニコする)

男 ・・・えーと・・・。あ、そうだ。何か・・・お礼にさ、何かあげよう。(ト、椅子にのせてあったカバンをテーブルの上へのせる)

さくら お礼ってなんのお礼？

男 これ（コップの水）の。

さくら あら、そんなのいいです。ただのお水ですもの。

男 いや、そんなことはないよ。

さくら ううん。だって、ほんとに、たった一杯のお水だもの。

麦茶、出したんじゃないし。

男 ・・麦茶、あったの・・。

さくら はい。

男 ふーん・・そう・・。ま、いいや。ま、いいやね。（カ

バンの中をさぐり）・・俺のさ・・ほんの気持ち。えー

と、何がいいかな。

カバンの中から、夜店で売ってたものの残り、例えば、

チエの輪、セルロイドのお面、古本、リリアン、糸通し

機等々・・が出てくる。

さくら オジサン・・これ・・。

男 ん？ 夜店でね、売ってるんだよ。その残り。

さくら へーえ。（覗き込む）あ・・これ・・。

男 ん？ ああ、エレヨーか。

さくら エレヨー？

男 ああ。エレヨーってんだよ、これ。

男、エレヨーをやってみせる。

ヒモがの伸び、縮むと、ヨーヨー、ぴかぴかと光る。

さくら

きれえー。

男

へへ、そうかい。

さくら

電気のヨーヨーね。

男

でんき？

さくら

すごい。

男

・・・電気のヨーヨーか・・・。(暫くやる。何かを思い出したかのように)

さくら

上手ね、オジサン。

男

・・・(ぼつりと)あいつ・・・これをもって嫁入りしてきたのか・・・。

さくら

え？ あいつ？

男

・・・たったひとつの電気製品か・・・。

さくら

お嫁入りって、オジサンのお嫁さん？

男

・・・そんなもんかなあ・・・思い出中の・・・。

さくら

思い出の中？

男

そう。山路来て何やらゆかしスマレ草ってねえ。ひっそりと咲く、野の花のような女よ。

さくら

へえ。きれいな人だったんですね。なんて名前？

男

・・・野の花に名前があるかい？

さくら

はああ・・・。

男

野の花は名もなく、貧しく美しく咲いているのよ。

さくら

その人・・・これを持ってオジサンのところにお嫁に？

男

そう……。ほらさ、おねえちゃん。たったひとつの電気製品ってやつよ……。

男、ヨーヨーをやる。一回、二回……。

ヨーヨーをじっと見つめるさくら。

伸びては戻り、戻っては伸びるエレヨー。

ぴかぴか……ぴか……。

ヨーヨー、ストンと床まで伸びて……コツン……。

明かり、すんとおちる。

(M“ふりむかないで”)

〔二〕昭和三十三年・夏

ある縁日。

男、屋台の上にエレヨーを並べて売っている。

男

さあさあ、おぼっちゃん、おじょうちゃん、ちよつと、

ご覧なさいよ。ね、ちよつと見てきなつたら。ハイッ、

コレッ。なんだと思う？ヨーヨー。あたりイー。君、頭

いいね。末は東大だね。うん、間違いないよ。けどどね

これ、コレは、ただのヨーヨーじゃないんだよ。いいか

い、ほーれ。(ト、やってみるが失敗) あ、失敗しちゃった。でもサ、今見た？見ただろ。ここんところがピカピカって光ったろ。え？見なかった？じゃ、もいっぺんやるからね、よーつく見てんだよ。ハイッ(また、失敗。けれど、それはしらんぷりしてごまかして) 見た？見ただろ。どうだい、ぴかぴかしてただろ。ね。不思議だねえ。なぜだろう、なぜかしら。．．あ、こちらのおぼっちゃんのご父兄の方ですか。聡明なおぼっちゃんですねえ。わたくし、只今、お宅様のおぼっちゃんと、理科の学習をさせていただいております。いいですか、お母さん。ここにとりいただきましたる、このヨーヨーは、世界の三大力、重力、遠心力、海水浴のうちのひとつ、遠心力を利用し企画製作されたものでございます。ハイッ(ト、やるが失敗。ぜんぜんこだわらず) どうです、このヨーヨー。ひかるひかる東芝、あっかるいナシヨナル、かの松下幸之助先生も、あけてびっくり玉手箱白髪のおじいさんになってしまったという、このヨーヨーの企業秘密。ヒントはひとつ。これは電気だ。さあ、どうだ。このぴかぴかヨーヨーの謎がとけた人がいたらオジサン、さかだちして小便してみせちゃうよ。謎のとけない人は、おひとつお求めいただいて、おうちでじっくり考えてもらうという、ハイッ、このぴかぴかヨーヨー、一個五十円！どうだ！．．．(客、いつてしまう)

あら、いいの？買わなくて．．．理科のお勉強なの

になあ。・・・(傍らのかき氷、ひと口食べる)・・・
溶けちまってやんの・・・ああ、暑いねえ。今年の夏は、
こりや、しんどいよ。あ、こら、坊主、だめだよッあけ
ちゃ。企業秘密だっていったろ。・・・(ヨーヨーやる。
電気がつかない)あ・・・こわれちゃった・・・ほら、あ
つちいて、あつちいって。シッ!・・・つたくしょうがね
えな、近頃のカギは。なんでもぶっこわして中見ようと
すんだから。“不思議だなあ”・・・これでいいじゃねえ
か、なあ・・・。ロマンがねえんだよ、科学の子ってゆー
のは。

ト、気付くと、すこし前から、ひとりの女がヨーヨーを
手にとっていた。

女は、二十歳位で、ショートヘアにマンボズボンをはい
ている。

男

どう、おねえさん、ひとつ。

女、無言で数度、ヨーヨーをやる。

男

お、うまいね。

女

(無言)

男

たいしたもんだね。

女

(無言でやってる)

男、へんな女だな・・・ト、ちらつと見る。

隣の金魚売りを覗いて・。

男

あ、おじょうちゃん。かわいいおべべだね。誰に買って

もらったの？おとうさん・・・の二号さん・・・あ、そう。

よかったね。・・・おっと、破けちゃったあ・・・金魚さん

逃げちゃったねえ。残念だったねえ・・・おじょうちゃ

んには、ちよっと、むずかしいよねえ。ね、ちよっと、

こっち見てみない？ヨーヨーよ。エレヨーっていうの。

あ、やってみる？ハイ、じゃ、ねえ、お手々のひとさし

指・・・それは、おとうさん指でしょう・・・それは、お兄

さん指ね。コレよこれ、お母さん指出してちょうだい。

いいかい。でもって、これをこうもって・・・そうそう。

・・・あのね、あなた、離さなきゃだめよ。離さなきゃ

これ下にいかないんだからね。(ヨーヨー落ちる)・・・

全部離しちゃダメなのね。

傍らで、さきほどの女、大変上手にやる。

男

あのおねえさん見てごらん。上手ねえ。おじょうちゃん

も、すぐにあんなふうに・・・

できるわけないじゃん。

女

男

(見る)

女

できっこないよねー。(しやがみこんで) ねえねえ、あなたたいくつ？ひとつ？ふたつ？(お尻のあたりをさわって) あー、まだおしめしてる。お尻のまわり、アセモだらけなんじゃないの？痒、痒ッ(お尻をポントたたいて) はやく取れるようにならなきゃダメよ。これはね、あなたにはできないわよ。だから、やめましようね。ハイ。(ト、ヨーヨーを台の上に戻す) あら、あっちで、おとうさんの二号さんが呼んでるみたいよ。はやくヨチヨチしてきなさい。迷子にならないようにねー。さよならー。

男

おい。

女

(子供の後を見送って、手なんかふってる)

男

おいッ。

女

え？

男

なんのマネだ。

女

なんのマネもしてないけど。これ、あたし、地声。

男

あんた、商売の邪魔しないでもらいたいな。

女

ジャマ？ あたしがー？

男

そうだよ。

女

してないわよ。

男

たった今しただろ。客おっぱらいやがって。

女

客って・・・今のよちよち赤ちゃんのこと？

男

そうだよ。

女

ゆるせないッ、あんたッ。

男 な、なんだよ。

女 あんた、あの赤ん坊に、ヨーヨー売りつけようとしてたの？ あんな、まだ卵から孵ったばかりの人間にッ。

男 あのなー、おまえ、人間てのは卵からでてくんじやないの。ちゃんとして・・・。

女 いやらしいわねえ。なに言い出すのよッ。

男 え？・・フン、ちゃんちゃらちゃんだねッ。

女 何よ、そのちゃんちゃらちゃんての。おまわりさん呼ぶわよ。

男 スツチャラカチャンつと。

女 なんなの、いかれてんじやないのッ。(うんざりして)

男 あー、たのしかった。(ト、行こうとする)

男 くら、待て。

女 何さ。

男 買ってけよな。

女 なあに。こんだ、押売り？

男 商売のジャマしたんだから、一個ッくらい買ってくのが

女 ジョーシキってもんだろ。

女 邪魔なんかしてないって、さつきから言ってるでしょ。

男 あんな赤ん坊に売りつけるあんたの方が・・・

男 二号が買ったかもしれない。

女 え？

男 あの赤ん坊の保護者だよ。お前、手振ってたじやないかよ。花柄のずどんとしたの着た、ちよい色っぽい・・・

女 ああ、あのサックドレス着た女ね。

男 そうだよ。

女 そっか。成程ね。あの二号さんが買ったかもしれないね。

男 そうだよッ。

女 そりゃ、悪いことしたわ。そこまで気イまわんなかったわ。ごめんなさいね。そいじゃ、一個買うわ。どれにしようかな・・・。

女、ひとつひとつ手にとっては、やってみる。

かなり、ハイテクニクなことやる。

男 うまいな。

女 (得意気にやる)

男 ほんと、うまいな。

女 ・・あんたは下手ね。

男 ・・・。

女 ヨーヨー売りが、ヨーヨーできないんじやしようがないね。

男 生まれつき不器用なタチなんだ。・女にも・なんち

やって。(眩く) あんまし、こーゆーこと言わないだ

けどな。てへへ・・・。

女 けけけけ・・・。

男 (無然)

女 ねえ、あんた、明日もコレ売るのが？

男 ああ。

女 あたし、手伝ってあげようか。

男 手伝う？

女 うん。こうやって、いろんなテクニックやってみせてさ

あ。ちつとは、売れるようになると思うよ。

男 へー。サクラになってくれるっての。

女 サクラ？ あたしは、すみれって名よ。

男 すみれ？・・・へええ、いいな・・・花の名前だ・・・。

女 あたしの名前だってば！（ト、口をとがらす）

男 だからッ・・・いいな・・・ってば・・・。

わら

女 ・・・・（ニカリと咲った）

（M“恋のバカンス”）

〔三〕 同じ夏

海の家。

男、バミューダーにアロハシャツ、黒メガネ。

女も、バミューダーにアロハシャツ（ペア）で、浮き輪
を持つてる。

男と女の前にはライスカレー。

男、立ち上がり、冷蔵庫から、ビールを出す。

男

(カウンターの奥に) おばちゃん、ビール、もらうよ。

(ト、カウンターの上のコップをひとつ取る)

女

(ライスカレーを食べながら) あたし、三矢サイダー。

男

(サイダーを出して) おばちゃん、サイダーもね。

男、サイダーをテーブルの上のせ、指をつっこんでコ

ップを二つ、あとビールを持ってきて置き、座る。

ビールを注ぎ飲む。

男

これ、喰ったら、宿に帰ろうな。

女

なんでえ？ もう、泳がないの？

男

プロレス見んの。力道山。ルー・テーズを破って、イン

ターナショナル選手権獲得なるかッ。うー興奮するぜ。

女

ふうん。

男

(ビールを飲みながら、ワクワク貧乏ゆすりしてる)

食べないの？

男

喰うよ。

女

全部？

男

うん。

女

グリーンピースも？

男

……。 (グリーンピースを拾って女の皿に入れてやる)

女 ありがとう。

男 うん。(暫く、女が食べてるのを見てるが) な・・・。
女 ん？

男 言いたくなきゃ、言わなくてもいいけどさ。

女 じゃ、言わない。

男 そうか・・・。

女 うん。

男 そうだよな。

女 うん。

女、ライスカレーを食べてる。

男も、スプーンをとって食べ始める。

男 あ・・・。

女 どしたの？

男 いや・・・。

女 ？

男 ・・こんなところに、グリーンピース隠れてた。(あげる)

女 ありがとう。

男 いや・・・どういたしまして。

二人、食べる。

男 あのさ・・・。

女
ん？

男
ひとつだけ聞くけどさ……。

女
……。

男
あのさ……。

女
(じっと見る)

男
……。じゃがいもと玉葱……。どっち好き？

女
両方好き。

男
そう……。

女
(じっと見る)

男
……。？……。や、やらないよ。やったら、タレだけになっ

ちやうじやないか。

女
……。そうね。

男
そうだよ。そうだ……。(ビールを飲む)

女
……。おとうちゃんの名はタツゾウ。おかあちゃんは

ナシ。

男
え？

女
あたし、橋のたもとで生まれてさ、赤線の女に育てられ
たの。

男
(待ってましたとばかり) どうして、それを早く言わな

いの、すみれちゃんーッ。

女
へへへ。

男
そうか……。それで俺なんかの後、くっついてきちゃっ

たのか。そうか……。そんじや、お前、あれだな、ちっさ

い時から、海水浴なんて連れて来てもらったことなんか

なくて……

そうそう。

可哀そうな子だったんだな。

そうそう。

男 　　女
そーかあ。……喰いな。(ト、ライスカレーを全部あげる)

女 ありがとう。(ガツガツ食べる)

男 　　女
そうかあ。ひとりぼっちかあ……。

女 　　男
そうなの。ひとりぼっちなの。

男 ひとりぼっち……だよなあ。

女 あんたも？

男 　　女
ああ。十六ン時に、オヤジにぶんなぐられて、家をおん出てから、はや十年。あっちの祭り、こっちの祭り……流れ流れて渡り鳥よ。心残りは、たったひとりの血を分けた妹。まだ、小学校にもあがらないガキだった。でも帰れねえよな、こんな兄キじゃ。思えば、この世に生まれおちた時から、俺の人生はミソつきだった。

女 ミソつき？

男 　　女
そう。品質保証っていうシールのかわりに、不良品てのをペツタリ貼られてた。

女 ふーん。

男 　　女
俺のオヤジってのが、女道楽でき、酔っぱらって芸者につくらせたのが俺よ。自分でやっつきながら、オヤジは言ったね。酔ってつくったガキは、生まれつきバカだつ

て。

ふーん。

男 俺はさ、もっとまじめにやってもらいたかったよ。ひどいじゃない。酔っぱらったはずみでやっちゃうなんて。タンポポの花粉だって、もっとまじめに翔んでくよ。そうでしょ。“めしべさーん、めしべさあーん”風にのつて男は彷徨うのよ。“あら、どちらのおしべさんからいらしたの？お見かけしない方だけど”“遠いところから来たものです”“まあ、それは、さぞお疲れのことでしょう。わたしのところでよろしかったら、どうぞ、おやすみあそべ”・・・そういうもんだろ。それをさ、酔っぱらったはずみなんかで、ぴゅっと・・

女、鼻から、グリーンピースをピュッと飛ばす。

男 ・・・。お前、今なにをした？

女 グリンピースとばした。

男 どこから？

女 鼻から。

男 ・・・。。

女 ね、できる？ 喉から、こう、鼻の奥にやって・・
男 できるわけねえだろッ。すみれ、お前なッ

女 あーッ！ ゴキブリの死骸。

男 え？ あ、ほんとだ。なんだよ、すごいねえ。ここんち

のカレー喰って、死んだんじゃねーだろな。

(ゴキブリをじっと見て)ふうん。ゴキブリって死ぬと

ひっくりかえっちゃうんだ……。

ああ……けど、ひっくり返ったから死んじゃったのかな。それとも、死んでからひっくり返ったのかな。

……。

どっちなのかなあ。

ちよつとまって。

ん？

……死んでからひっくりかえられる？

え？

死んだんだから……。

そうだな……。そりや、ま、そうだけど……。気持ちにはわかるよな。

気持ちって？

いや、だからさ、仮にさ……。死ぬとするよな。

誰が？

誰って……例えば、俺。

あんた？ うん。で？

倒れたとするじゃない。こう、ボタンとき。でもって、やっぱり死ぬんだから、多少は苦しいだろ。だから、大地をさ、かきむしったりするかもしれない。

うん。

けど、やがて息たえてしまうわけね。

うん。

男 …… やじゃない？ そういうの。

女 …… そうねえ。

男 それよか、死ぬなって時にはさ、ごろんと仰向けになつて、こう… 踊りみたいなことやってさ、で、ボタン・

…といきたいって思わないか？

女 踊りみたいなこと…。

男 そ。なんでもいいんだよ。盆踊りでもなんでも。

女 …… 死ぬ間に盆踊り踊るの？

男 …… う…ん…。

女 …… 踊れるかな…。

男 だから、それは理想よ。やっぱりね、そこまで余裕のある奴はあんまりいないとは思うよ。

女 ほとんどいないんじゃない。

男 だからさ、やっぱり、俺なんかは、地べた搔きむしって死ぬんだろうなと思うわけよ。けど… そのあと…

誰かが、ひょいってひっくり返してくれたら… いいな

あつて思うんだ。

女 ……。それでわかるわけね、ゴキブリの気持ちが。

男 そう。

女 ゴキブリがそこまで考えてるかどうか…。

男 ま…ね。

女 うーん。(ト、しゃがみこんで考える)

男 もう、いこつか…。(奥へ)おばちゃん、いくら？

女 (じっと見つめながら)・・・考えていたとして・・・。

そこまで考えて、死ぬ前に自分でひっくり返ったんだ
としたら、こりや、たいしたゴキブリ・・・

男 (振り返って)・・・行くよ。・・・プロレス見んだから。

・・・おい、すみれ。

女 ・・・長生きすると思ったけどなあ。

男 え？

女 ゴキブリ。

男 ・・・長生きかあ。

女 そうよ。

男 そうだよなあ。ゴキブリにとっちゃ、今の季節、いっと

う、いい時だよな。

女 ・・・弱いよ、こいつ。・・・へんな奴・・・。

男 (じっと、見つめる)

女 ・・・ねえ、死ぬんだったら、春だよね。

男 そう？

女 うん・・・。

ゴキブリをじっと見つめる二人。

ト、ぶうんと羽音。

二人、目で追う。

男 蠅・・・。

女 蠅だ・・・。蠅は元気だなあ・・・。強いな、蠅は・・・。

男

いや、ゴキブリの方が強いはずだよ……。

蠅、ぶうんとカウンターの中に入っていく。

覗き込む二人。

ト、バシリツとたたく音、カウンターの中から。

二人、振り返って、再びゴキブリ見る。

女

……こいつも、やられたのかな……。

男

……殺虫剤かもしれない……。

女

事故死……。

男

？（フト、女を見る）

二人、ゴキブリをじっと見つめたまま・手を握った・。

〔四〕 同年・秋

舞台、暗いうちから、東京タワーのエレベーター内放送

聞こえてくる。

“ 本日は、東京タワーにおこしいただき、誠にありがとうございます。このエレベーターは、タワービルを通過

し、大展望台まで上昇いたします。大展望台は、地上百五十メートル、塔の高さの約半分の位置にございます。夜空に美しく浮かび上がる東京タワーの照明は、塔各所に設置された百四十八灯の投光器によって、演出されます。その光の色も、冬はオレンジ、その他の期間は、昼光色に変えて季節感を出しております。また、塔体の輪郭に沿って設置されている、エメラルドグリーンのイルミネーションには、六百九十六の電球が使用されております・・・”

明かり、入る。

男、何となく不安気な表情で、女は、浮き浮きした表情で、フロア表示盤を見上げている。

女
(下を見て) ひゃあ、すごいすごい。こりや、高い！
ちよつと、見てごらんよ。

男
(見ない)

女
ねえ、あれ、増上寺でしょう？

男
ん。(ト、見ないで答える)

女
ねえつたらッ・・・あれ、もしかして、高所恐怖症？

男
・・・ま、まさか。

女
東京湾に浮いてる船がこんなんだよ。

男
(ちらと見て) あ、ほんとだ。(すぐ、正面を見る)

女
(やっぱり、高所恐怖症なんじゃないの？ ト、いう疑いの眼差し)

男 やだねえ。五十メートルも上に来ちゃうと、でっかい船が、こんなだもんね。

女 五十メートルじゃないよ。百五十メートルよ。

男 (ゾクツとくる)・・・ば、馬鹿はき、た、高いところに昇りたがるってつけど、東京って、バカばつかなんじやないかつ。

女 地方からも来てるよ。静岡とかさ。

男 馬鹿だねえ。静岡には富士山があるじゃねえかよなあ。

女 昇ったことあるの？

男 ないよ。てっぺんは、空気が薄いんだって？・・・あれ

・・・あ・・・めまいする・・・。東京タワーって確か富士山とおんなじくらいの高さなんじゃなかったっけ・・・。

う・・・息が苦しい・・・うつ・・・。

エレベーター、着く。

“おまたせいたしました。大展望台に、到着いたしました。ました。”

押し出される二人。

男、エレベーターから、離れない。

女 ひゃー、すごい、すごい。いいこいこつ。。。なにをしてんのさ。

男 ・・お前いってこいよ。俺は、アレ・・・その・・・ここで待ってるからよ。

女 見ないの？

男 見ないの・・・。

女 二時間も並んだのにいーッ！

男 見ないのッ！

女 あーッ、そッ（ト、女、男の手をぐいぐいひっぱって、

エレベーターに乗り込む）

男 （ホッとして）そーだよ、そーだ。帰ろ、帰ろ。

女 （ニヤリとする）

エレベーターのドア、閉まる。

“地上二百五十メートルの特別展望台へは、約一分ほどで到着いたします”

エレベーター、ごわわ〜んツと上昇！

男 えええーッ！（青ざめる）

（M“月影のナポリ”↓in）

まんまるのお月様が出た。

女 見てッ！ お月さんッ、きれーッ！（ツイスト踊る）

男 よ、よしなさいよッ！ よしなつてばッ！（ト、叫びつつツイストになりつつ）こゝこわれたらどすんだよッ。

女 すごいすごいッ。お月さんが、こんな近い！

女、ツイスト。男も、ツイスト・だが、当然のことながら、男の方は、“よしなさいよッ”と言いつつのツイスト。

やがて、エレベーターは、特別展望台に着いた。

しーんとしてる。

男・女

? . . .

女

ここ・・特別展望台？

男

だろ。

しーん。

男

(薄気味悪い声を出し) ねえ・・知ってる？

女

(びくんツとして) え・・。

男

東京タワーってさ、墓地をつぶして建てたんだって。風

の日に、ひゅーひゅーって音がするのは、つぶされた墓

地の死人の恨みの声なんだってさ。ヒヒヒ・・。

女

あ、あんた、仕返ししてないッ？

男

ヒヒヒ・・。

女

くそう・・。ねえ・・知ってる？

男

なあに？

女

東京タワーってね、ほんとは、ちょっと傾いてるんです

ってよ。

男

えッ。

女
飯倉片町の方から見るとね、この特別展望台って、ぐるんてさ。・・・ヒヒ、地上二百五十メートルがぐるぐるな
んてねえ・・・。

風が吹いてきて、ぐらりと揺れる。

男・女
げえええーッ。(抱きつく)

男
だ、だから、やだって言ったんだよッ。な、なんだよ、
ここッ。へんだよッ、どーして誰もいないのさッ。でき
たばっかだよッ。に、二時間も並んだんだぞッ。だのに
さッ、お、おかしいじゃないのッ！お、お前ッ、お前が
こんなこと(ツイスト)やるから、へんなとこきちやつ
たんじゃないのッ！

女
ひ、ひとのせいにするのかよッ。

男
な、なんだあッ。

女
ち、ちよつと見て・・・お月さんが、消えちゃったよ。

男
え？

女
さつきまで、まんまるに出たのに。

男と女の前方が、なにか、きらきらと光っている。

女、そつと、その方へ近寄り、手を伸ばす。

女
・・・これ、なんだ・・・？(ト、石のようなものを取る)

男
え・・・？

女 どうして、こんなところに、こんな石が落ちこちてるんだ
ろう……。見て。ひかっている……。
男 光ってなきや、ただの軽石だな……。
女 ……きれえ……。

ト、特別展望台の回りのガラス窓（さっきまで、外は夜
だったのに）から、風景広がる。

女 （窓に駆け寄り）わあーっ。

窓の外には、夕暮れの砂漠の様な景色が広がっている。

女 増上寺、どこ？

男 ……ない……見えない……。

女 東京湾は？

男 それもないな。

女 どして？……どしたのさ……ここ……。

男 ……うん……。

“ウナセラデイ東京”流れてくる。

女 あのあたり、代々木？

男 かな……。

女 あの大きい建物なに？

男 あんなのあつたっけ？

女 あっち、新宿？

男 たぶん・・・。

女 あれ、ビル？

男 みたいだな・・・。

女 すごく高かない？

男 うん・・・高い・・・。

二人、暫く外の“砂漠”に見入っている。

女 あれ、空港？・・・ねえ、東京に空港、二つもあつたっ

け？

羽田だけだよ。

女 でも、あそこ・・・千葉の方・・・浦安あたり？

男 浦安は、もちよつと・・・あれえ、浦安の傍で鼠が踊って

ら。はは。

女 ははは。鼠ってちっこいね。

男 ハハ・・・けど、なんで、あんなちっこいもんが見えるん

だ？

窓の外、砂塵が舞う。

女 消えちゃつた・・・砂漠・・・みたい・・・。なに？ っ。

・・・ねえ、へんよ、っ。

男 (石を振り返って)・・・光・・・消えた・・・。

女 あッ・・・。

男 どうした？

女 お月さん・・・。(ト、窓の外を指す、月、光々と照つ
ている)

男 ……。

女、じつと窓の外を見たまま・

女 ねええ。

男 ん？

女 東京じゃ、あたしたちなんて、砂漠の砂粒だね・・・だ
から、来たんだけどさ、あたし。

男 へえ、砂粒になりたくて？ 東京に？

女 ……砂粒、好きだよ、あたしは。あんたは？

男 俺？

女 うん・・・嫌い？

男 そうだなあ・・・。

女 そんなじゃ、お豆は？

男 おまめ？

女 うん。

男 なんで、豆さ？

女 だって、砂粒よか、大きいでしょ。少しでも大きい方が
あんた、いいのかと思って。

男

・正月の黒いやつあるでしょ。あれは、俺、好き。

女

ああ、あたしもだ。・・・ねえ。

男

なんだ？

女

お正月も、東京にいるの？

男

いや、あったかい方に行く。九州とか、四国とか・・・

女

き、きゅうしゅう！・・・は、やめようよ。

男

やめようって、すみれ・・・お前も行くのか？

女

うん。行くよ・・・いでしょ。

男

・・・俺は・・・その・・・いいけど・・・。

ト、エレベーターが開いて、人がどやどやと出てきた。

“あー、まいった。途中でとまるんだもん”トカ、

“動かなくなったら、どうしようかと思っただわ”“まっ

たく、できた早々、故障なんてなー”“ほら、ボク。マ

マから、離れちゃダメよ。迷子になっちゃうわよ”等々

の声が聞こえてくる。

にわかには、賑やかになるフロア。

ぼんやりと、人々を見ていた男と女、ふと、男の手の中

の“石”を見つめる。

塔内放送・“特別展望台へようこそ。エレベーターを

出て正面西側には、浜離宮、東京湾、房総半島が見渡せ

ます。右手北側には、昨年岸内閣が発足した国会議事堂

ウエスタンカーニバルでおなじみの日劇・・・”

〔五〕 同年・冬

東京のある旅館。

男、出てくる。

男

(中に向かって)・・・どうも失礼いたしました。では、わたくしは、これで・・・いえいえ、とんでもございません。では・・・おじょうさまに、よろしく。失礼をいたします。は、どうも。

女、飛び出してくる。

女

ちよつと、待ちなさいよッ。

男 (振り返って) なんだよッ、すみれ。お前・・・(ト、中を指す)

女

なにが、おじょうさまによろしく、よッ。さ、行こッ。

男

なに言ってるんだよ、お前。(ト、中を気にする)

女

行こつてば。

男

(腕をつかみ) 待てよ、待てたらッ。

女

なにさ。

男

御両親どうすんだよ。

女

ほつときゃ、鹿児島に帰るわよ。

男
んな訳ないだろ。わざわざ、お前のこと探しに東京まで
来たんだから。

女
ふんっ。あんただって見たでしょう、あのいばりくさっ
た態度。

男
・・・そりや、まあ、多少、オーヘイなどはあつたけ
ど・・・。

女
でしょ。そうなのよ。そういう奴らなのよ。

男
けど、しょうがないよ。西郷隆盛の子孫なんだろ。

女
それがなにさ。

男
すげえでつかい家に住んでるって・・・お前・・・。

女
あたしは、住んでないじゃない。

男
ひとり娘なんだろ。

女
腹違いがいっぱいいるわよ。

男
けどさ、すみれ。お前のこと心配して、探しに来たんじ
ゃないか。

女
まったく、東京なんて、これだけ沢山ひとがいるっての
に、なんで見つかったんだろ。運が悪かったらあ
りゃしない。

男
すみれ・・・。お前、どうして嘘ついたんだよ。帰る家
がないなんて・・・。

女
・・・ないわよ。帰る家なんて・・・。

男
おとうちゃんの名は、タツゾウ・・・これは、ま、ほん
とだったけど。

女
それで、あたしは、タツのおとしじ。

男 母親はナシなんて・・・ちゃんと、いるじゃないか。

女 あの人、ママハハだもん。鬼のママハハよ。

男 きれいな人じゃないか。

女 どこがッ。

男 全体に・・・なんてえの、こう、上品なさあ・・・。

女 ふん、うわべだけよ。典型的なママハハのパターンじゃない。

男 橋のたもとで生まれたなんてでたらめ言ってる・・・。

女 橋本総合医院ってところで、産まれたんだもの。

男 お茶の水出た、乳母っていうの？ 家庭教師っての？

男 そういう、ちゃんとした人に、育てられたってじゃないか。赤線の女に育てられたなんて、よく言うよ。

女 けど、その乳母の名は・・・

男・女 アカセン。

男 あのなー、すみれ。俺はな、お前が、ひとりぼっちだつて言うから・・・。

女 ひとりぼっちよ。

男 (強く) 違うだろッ。

女 (ギクツとするが) な・・・なにさ・・・。自分だって、あんただって、血をわけた妹がひとりいるって言った

じゃない。どこにいるのよ。どうして、帰ってやらないのよッ。

男 (詰まる)

女 ……嘘なんか言ってるじゃないよ……。親がいたって、大

つきい家なんかあったって、ひとりぼっちは、ひとりぼ
っちなんだからッ。

・・・そうグレンなよ。

あんただって、グレてんでしょ。お揃いじゃない。

俺は、やむにやまれぬ事情から、グレたんだ。ちゃんと
世間に筋が通るグレかたしてんだ。お前のは、筋が通っ
てないぞ。

なんで？ ママハハにいじめられて、グレるのって、す
ごく筋が通ってるじゃない。

いじめられた、いじめられたって言うけど、お前、ほん
とにいじめられたの？ お前みたいな元気なの、いじめ
られるママハハなんているかなあ。

どういう意味さ。

いじめられっ子ってのは、もっとおとなしくって、気が
弱くってオドオドしてるんじゃないか、普通は。

世間とか普通とか、あんたって、型どおりにしか物を考
えられないのね。そんなことでどうするのよ。しっかり
しなさいよッ。

ほらね、それだけファイトがあるのにさ、なんでママハ
ハにいじめられんだよ。

いじめられたのッ。ぜったいよッ。

ふうん。

だいたい気にいらないのよ、あの女。妙にあたしに気が
ねするのよね。オドオドしてるの。堂々としてりゃいい

のにさ。ちょっと口きかないと、すぐ、襖のかけで泣いたりするんだから。

男

やっぱり、お前がいじめてるよ。

女

いいえ、違います。あの女に冷たくすればするほど、邪険にすればするほど、あたしは、どんどん傷つくの。それで、もっともっと冷たくするの。そいでもって、またまた傷つくの。どんどん傷つくから、冷たくするのも念いりになってくるの。そのうち、ヤミつきになってきて傷つくから冷たくするのか、冷たくするから傷つくのかわからなくなって、それでも、ヤミつきだから、やめられないもんだから、どんどん、ぐんぐん、じゃんじゃん……。わかる？　こういうの？

男

……悪い性格……。

女

それ……。

男

ダメな性分……。

女

それよ……。だから、ごめんなさい、みたいな気持ちで……ひとりぼっちって思うの……。そう自分にいいきかせて……。それで、逃げ出すの……。

男

でもさ、すみれ……。お前の場合、御両親に迎えにこられちゃった訳だし……。ちゃんと家に帰れば、やり直せるかもしれないじゃないか。

女

やり直す？

男

悪い性格……良くなるかもしれないじゃないか。

女

……。

男 ・ ・ 一生 ・ ・ 逃げられるもんじゃない ・ ・ と思うよ。

女 あんた、本心から、そう思うの？

男 ・ ・ ・ うん ・ ・ ・ 。

女 自分のこと、ひとりぼっちって決めたあんたが ・ ・ あたしに、そんなこと言うの ・ ・ ・ ？

男 俺と ・ ・ ・ 俺とお前は違うって ・ ・ ・ 探しに来たんじやないか。 ・ ・ ・ 帰ってやれよ。グレるなよ。

女 ・ ・ ・ あんたも ・ ・ ・ 帰る？

男 え ・ ・ ・ 。

女 あんたも、妹さんと共に、帰る？

男 俺は ・ ・ ・ 。

女 帰る？

男 ・ ・ ・ そのうち ・ ・ ・ な ・ ・ ・ 。

女 そのうちって、いつ？

男 そのうちは、そのうちだ。 ・ ・ ・ いいんだよッ、俺のことは。いいんだったらッ。

女 そう ・ ・ ・ 。いいわ、あんたが、そんなふうになんか開いてくれない態度だなんて ・ ・ ・

男 な、なんだよ、突然。ちがうだろッ。

女 なにが違うのよッ。あんたって、自分の気持ち、隠してばっかじゃないッ。そんな ・ ・ ・ そんなあんたに何いわれたって、あたしッ、あたしッ！（泣きそうになる）

男 や、やめろよッ、やめなさいってばッ。こ、興奮しないで。

女 だ、だって！

男 わかったよ、わかった！ 帰る。俺も、可愛い妹んとこに、帰る。そんで、正しい兄ちゃんになるべく努力しますよッ。そんでいいんでしょ。

女 ……(呟く) わかってない奴……ばかやろ……。

男 そうしょ。な、な……そうかあ、俺たち社会復帰するぞう。

女 ……いいわ……。あたし、親父とクソババと一緒に鹿児島、帰ります。

男 そうか。やっと、決心がついたか。よかったよかった。

女 そのかわり、あんた……。

男 え？ まだ、なんかあるの？

女 お願いがある……。あんた、あたしに逢いにきてくれる？

男 え……。

女 鹿児島にきてよ。妹さんと一緒にいいから……。

男 ……。

女 このまんま、もう一生逢えないのいやだよ……。

男 すみれ……。

女 国鉄の鹿児島駅で降りて、日豊本線に乗り換えて六つめの“隼人”で降りて、改札出ると、食料品屋があるの。

男 サンドルとか祝儀袋とか売ってるのね。

男 それ、食料品屋？ 雑貨屋じゃないのか？

女 牛乳もあるわ。でも、飲まないほうがいいよ。あの店の

おばあちゃん、牛乳のフタあける時、手が震えるから、ものすごく時間かかるんだ。

男 そんなじゃ、自分であけるって言ったらいいな。

女 耳、遠い。

男 あ、そう。

女 うん。だから、ウチまで我慢してよね。

男 わかった。どんなことがあっても我慢するよ。

女 それで、その食料品屋と自転車屋の間の道を、まーッすぐいって、ひとつふたつ・みつつめの三叉路の右からひとつめの道を行って、でもって、また、ひとつふたつ・メモしなくて大丈夫？

男 え？・・・ああ。(ト、しゃがみこんで地べたに地図を書く) えーと、駅前、ずっと来て、ひとつふたつ・みつつ・だっけ？

女 うん。で、三叉路。

男 サンサロ・・・と。右からひとつめ、と。はい、次、どうぞ。

女 ……。食料品屋のおばあちゃんに聞いて。

男 え？　なんで？　書いてるよ。

女 (ぶすつとして、地図の端っこをあてつけに足で消す)

男 (意味わからず) なにすんだよ。

女 おばあちゃんに聞きなっばッ。

男 手の震えるおばあちゃんなんだろ。

女 道を教えるのは、うまいの。

不思議なおばあちゃんだね。

(頷いて) 人間、年とると、皆な不思議になるもんよ。
なるほど。

．．．きっと、来てね。あたし、待ってるから。

．．．ああ．．．。

ぜったいよ．．．でも．．．その時まで．．．。

え？

グレてんのなおってなかったら．．．そしたら．．．。

だいじよぶ。なおるって。

．．．．．。

すみれ．．．。

ん？．．

．．がんばれよ。

．．．まあ．．ね。

．．．いっぺんくらいは、はいつて言えよ．．．。

．．．．．

．．言わねーのなあ．．お前って．．。

ね．．ねえッ。

え？

．．．ま．．またね。きっと、またよ。

ん．．．あ．．そうだ。

え？

これ．．(ト、石を取り出す)

あ．．．東京タワーで拾った石。

やるわ。

いいの？

男 いーよ。なんか不思議な石だったもんな。お前が持ってたほうが似合うってもんよ。

女 ・・これも（エレヨーポケットから出し）・・もらっていい？

男 こんなもん、まだ持ってたのか。・・しっかし、こりゃあ、売れなかったなあ。

女 うん。ほんと、売れなかった。

男 やるよ。記念にとつときな。

女 記念？ なんの記念？

男 だからさ・・俺たちが、一緒にテキヤをやったっていう・・。

女 ・・なんだか、もう二度と逢えないみたいなこと言うのね。

男 （慌てて）えッ、ち、違うよ。そーゆー意味じゃないって。

女 ・・ま・・いいや・・。

男 そうだよ、何言ってるんだよ。

女 うん、そだね。

男 そんじゃ、すみれ。元気で・・。あ、だから、さいならって意味じゃないよ。とりあえず、とりあえずだ。

女 わかってるって。

男 うん。ほんじゃ、ま・・あばな。（去る）

女

あば・・・(ト、言いかけるが照れ気味のしおらしさで)

はい・・・。ねえーッ・・・あのさーあ、さび・・・さびし

くなったら、これ(エレヨー)で遊んじやうねーッ。あ

たし、うまいっから・・・。あんた、へたっぴいだっ

(男の姿が見えなくなった)・・・知ってるよ・・・あん

た、家になんか帰らない・・・でもって、あたしんこ

にも来ない。・・・かっこつけしーだもん・・・。(石を

見つめて)・・・お月さんがきれいな晩だったなあ。こい

っ、ぴかぴかかって光って・・・そしたら、東京中にぶわあ

あーって風

が吹いて、砂漠みたいになって、お月さん消えて

こいつだけ光って・・・。これ、お月さんのかけらかも

しれない。(じっと見つめながら)・・・あの人、来るかし

ら・・・来るって言ったもん・・・地図書いたもん・・・あ

人、来る?・・・あの人・・・。

一陣の風。

地べたの地図、消える。

女

!・・・(ある・恐怖の表情)

明かり、落ちる。

(M“恋のフーガ”↓in)

明かり、入る。

男

(テキヤ姿で例の“石”を売っている) さあさあさあ、ちよいと、コレ、見てつてちようだいよ。さて、これはなんだ？ 軽石？ ダメよ、おばあちゃん。夢がないねえ、夢がさあツ。こいつは、ただの軽石じゃないよ。実はね、これ、月の石なのよ。あ、そこのおねえちゃん、馬鹿にして笑ったね。そーゆーことやってると、美人になりそこねっちゃうのよ。この月の石で、こーさ、こすつてごらんよ。つるつるのぴかぴか、タコもイボもポロリだよ。なんてったって、めったに手に入らない月の石で出来てんだから。どう、これ、一個、百円！ なに？ 高い？ しょうがねえなあ、ほんじゃ、九十円にまけちやうツ。よし、末広がりで、八十八円！ 八十円!!・・ どうだツ、もってけ！ ドロボーッ！

明かり、おちる。

(M“恋のフーガ” ↓ F・O)

〔六〕 昭和三十四年・春・夏

弘前の小さな安旅館の二階。

夕刻。

窓から、桜の木が見える。

男、カバンをさげて、ビールの瓶（コップがかぶせてある）と、ピーナッツの袋を持って入って来る。

男

（桜に気づいて）へー、桜かあ。こっちは、まだ蕾だなあ。再来週あたりは咲くかね。弘前城の白壁に桜・きれいだろいな・。いつもだったら、三月のあたまころには、九州は鹿児島、熊本、それから小倉、尾道と、ずっとくだってさ、四月は関東・。俺の旅は桜と一緒によ・。それがどうだい、今年は、訳あって、どうにも南のほうには、行けないときてる・。おかげで、まだ花見もしてねえや。そうか、桜か・。あ、おやじさん、晩飯はいいよ。ひと休みしたら、どっか外行って喰ってくるから・。東京は、今がちょうど見頃なんだろうな・。春はいいな、日本全国、花ざかりだもんな・。うん、ほんと、春はいい・。

男、ビールを飲み、ピーナッツをかじりながら、桜に見入っている。

かすかな花吹雪。

女

・。死ぬんだったら、春だね・。

男

そうだなあ、そうかしん・。えッ？（振り向く）・

す、すみれッ。

いつの間にか、女が畳の上にちよこんと座っている。

女 や。(ト、ちらと手をふる)

男 や・(ト、思わず答え)・お、お前・い、いつ、
来たの!?

女 今。

男 よ、よくわかったな、ここが。

女 そりや、・だもん。

男 え?

女 ・だもん。

男 なんだって? なに言ってるの? お前。

女 (男の傍らの新聞を指す)

男 え? 新聞? 読むの? ・はい。(ト、渡す)

女、新聞をひろげ、ある記事を見つけて、溜め息とともに、男に示す。

男 何? 皇太子、御成婚・正田美智子さん、ミッチーね

え。きれいな人だよな。もったいねえよなあ。

女 (首をふり、記事示す)

男 え? サザエさん?

女 ・・の下・・。

男 え? コレ? ・・(読む) 四月九日、午後五時頃、鹿

児島隼人町の会社社長、西郷龍三さん、五十八、宅の

・・・あれ、これ、お前のオヤジさん・・・。

(頷く)

男　・・・龍三さん方の終の垣根に、若い男の運転するトヨ
ペットコロナがつっこみ・・・え？(見る)

(頷く)

男　垣根の傍でグレていた西郷さんの長女、すみれさんをは
ねとばし・・・ええーッ！？

女　・・・そうなの・・・。

男　そうなのって、お前・・・(慌てて読む)すみれさんは、

すぐに近くの橋本病院に運ばれたが、午後六時すぎに死
亡・・・え・・・す、すみれ！？

女　・・・てへへ・・・(ト、頭をかく)

男　お、お、お前・・・あ・・・

(大きく溜め息)

男、恐る恐る乗り出し、女をじっと見つめる。

女　あたしんとこに、きっと来てくれるって言ったのに、ど
うして、来てくれなかったのよう。ちよーし、いいんだ
からッ。

男　す・・・すみれ・・・お前・・・その・・・ほ・・・ほんとに・・・
し・・・死んじゃった・・・の？

女　うん。免許とりたてだったらしいわ。隣の村の若い男。

(信じられない)

男

女

男

女

女

男

女

男

女

男

女

男

女

女 コロナにはねられて、あたし、うつぶせに倒れたの。す
—つと遠のいていく感じの最中に、あたし、あなたが言
つてたこと思い出したわ。

男 え？

女 死ぬ時は、あおむけで死にたいって……。ほら、ゴキブ
リの話、前にしたじゃない。死ぬ時は、あおむけになっ
て、こう、盆踊りでもやって……。けど、やっぱり、
そんな余裕ないもんよ。

男 そ・・りゃ、そうだろうな・・。

女 あたし、あなたが言ってた通りに、ああ、嫌だな、あお
むけになりたいって、その時思った。あんたがいたら、
ひっくりかえしてくれるのって・・。

男 すみれ・・そうか・・そうだったのか。あおむけにな
りたかったろうに・・かわいそうに・・かわいそうにな
あッ。

女 あんたが、逢いにきてくんないから、あたし、コロナ
んかにやられちゃったわよ。くそッ。

男 お前、どうして、庭なんかで、グレてたんだよ。ちゃん
と、家の中でグレてればよかったのに。

女 どっちにしたって、あんた、来てくれなかったじゃない
の。こんなところにいてさ。南のほう避けたでしょ。ひ
どいよ。あんた、あたしのこと、嫌いだったの？ あた
し、好かれてるとばっかり思ってた。

男 き、きらいだなんて、そんなことないよ。ぜったいない

よッ。

女 あたしは、あんたが、好きだわ。・・・これは、パワ

―ね。そりや、幽霊に押しかけ女房されるのなんて、あ
んた、嫌でしょうけど・・・。

男 そ、そんなことないよ。幽霊にだってなんにだって、嬉

しいよ、押しかけ女房なん・・・押しかけ女房!?

女 ・・・ダメ?・・・

男 ・・・。。。。ううん・・・いいけど・・・。

女 ほんと!?

男 ・・・うん・・・。

女 ああ、よかった。やっぱ、来てみてよかったあ。なん
も、やってみるものよね。うううんッ。(ト、ふる
ふる震える)

男 (ギョツとして)ど、どうしたんだいッ。

女 嬉しいと震えがくるの。ずいぶん体質かわったわ。

男 そ、そりや、そうよ。そうだろうとも。・・・ハハ・・・。

女 照れちやう。

男 え?

女 へんな体質で・・・。

男 (なんとなく照れて)いいよ。かまわないよ、俺はぜん
ぜん。

女 そーお?

男 うん。

女 そんじや、ほんとのほんとに、お嫁さんにしてくれるの

ね。

男　・・う・・うん・・。よし、しようじゃないかッ！

女　・・ずうずうしくってごめんさいね。

男　そんなことないよ。ちつとも、ずうずうしいって感じ、
しないよ。だって、ほら、なんてーの、お前・・そっち
から、ぜんぜん圧迫感ないもの。(両手であおぐ動作)
女　なんか、風、ふいてくるみたいなき感じだもの。

男、あおぐと、女、上半身から、そよそよと近づいてき
て、男の肩にもたれかかる。

男、肩に腕をまわす。

女　お嫁さんにしてもらうんだから、こんなこともしちゃう
よ。(ト、胸に顔をうずめる)

男　いいよ・・・。誰も見てないんだから・・。

女　そよね・・。

男　そだよ・・・。

男・女　?・・・。

女　うふふ。

男　あはは。

女　ねえ、ひっくりかえして・・。

男　(ギョツとして)え・・。ここで?

女　ダメ?

男　・・いや・・いいか・・。旅館だもんな。あ・・いや、

やっぱり、ちゃんと所帯もってからにしよう。アパート
借りなきゃな。

小さいのでもいいわよ。

男 けど、四畳半はなくちゃな。だって、タンス置くだろ、
ちゃぶ台だろ。いや、四畳半じゃ、布団二つ敷けないか
女 な・・・。

ひとつでいいじゃないの。

男 な、なんてこというんだよッ、すみれッ・・・ひとつに
女 しよう・・・。

そうよ。あたし、空中に浮かんたまま、寝られるんだか
ら。

男 そ・・・そんなかなしい話ってあるか？ 降りてこいよ、
降りてこられるんだろ。

ありがとう。やさしいね。

男 やさしくなんかねえよ・・・俺なんか、どっちかってい
女 ったら、ごく普通だよ・・・。

・・・普通よか、ちよつと上よ・・・。

・・・ビール、飲むか？

女 (首を横にふって) ダメなの。素通りしちゃうの、あた
し の体・・・。やってみせようか？

男 い、いいよッ。そ、そういうことをやるなよ。やらない
でいいよ・・・これからも、ずっとだぞ。

女 うん・・・わかったよ・・・。(ト、淋し気)

男 (急につまって)・・・可愛いそうに・・・可愛いそうにな

あ・・・。

泣かないで。

泣かないよ。(泣く)

(フト、窓の外を見て) 見て。

・・・(見る)

いつの間にか桜が満開である。

おーッ。

ねえ、前にさ、こーゆーことあったね。

え？ 桜が？

女 桜じゃなくて、砂漠・・・。ほら、東京タワーに昇った
男 時・・・。急に、東京の町が砂漠みたいになって・・・。不
思議だったよね、あん時は。花吹雪って、砂嵐と似てる
よ。死んで、はじめてわかったの。空のほうから見ると
ね、世の中って砂漠なんかじゃない。東京タワーから見
えたみたいな砂だらけじゃない。昔っから、ずっと花吹
雪。気づかなかったただけなの。そうしたら、なんだか、
あたし、ここ(胸)んとこが、すうって、きれいな心持
ちになったみたいなの。・・・グレてんのなおっちゃつ
た。今更、遅いけど。・・・ねえ、どうして、あの時、東
京の町は、砂だらけだったのかなあ。
男 俺は、ずっと花吹雪だって思ってたよ・・・。
女 月の石・・・地上におちてきちゃいけなかったのかなあ。

桜、舞う。

男

・・・(振り向く)・・・すみれ・・・？

女の姿がない。

男

すみれッ！

男、女を探す。

襖の中、押し入れの中、窓の外も探す。

カバンの中、帽子の中、上着の中・・・畳を持ち上げよう

として、さすがに、これはやらない。

ト、足元で、コロン・・・とエレヨー、ころがる。

男

すみれ・・・。

男、エレヨーを握りしめ、窓に手をついて、うつむく。

暫くして、しずかに頭を上げる。

男

・・・桜・・・きれいだな・・・。

女の声

サクラ？ あたしは、すみれって名よ。

男の声

すみれ？・・・へええ、いいな・・・花の名前だ・・・。

女の声

あたしの名前だってば！

男の声

だからッ、いいな・・・ってば！

桜吹雪。

男

(くるりとふりむいて)・・・おしまい・・・ほんとにあつた怖いお話、おしまいだよ、おねえちゃん。このヨーヨー、おねえちゃんにやるよ。

明かり、ひろがると、もとの店。

さくら、“月の石”を握っている。

さくら

ほんとにあった、かわいそうなお話でしょう？ オジサン・・・かわいそうで、へんてこなおねえさんねえ。これ・・・ください。

男

え・・・。

さくら

月の石、ください・・・すみれっておねえさん、ほんとは、来ちゃいけなかったのよね、オジサンのところにだって、死んじゃったんですもん。でも、来ちゃったのね・・・そういうこと、あると思う・・・なんとなくだけど・・・気持ち、わかる。

男

・・・おねえちゃんは、かしこい子だね。

さくら

おませって言われるわ。ねえ、夏目漱石はこう言ったのよ。“かわいそうだから、惚れたってことよ”って・・・

意味わかる？ あたしは、わかるわ。

男
なに？ 可愛いそうだったのは？ ナンダ？ホレたってことだあ？

さくら
そうよ。

男
・・・だれだ。そんなバカなこと言ったのは。

さくら
だから、夏目漱石よ。知らないの？ 偉い人よ。聖徳太子より尊敬してるのよ、あたしは。

男
・・・聖徳太子のほうが偉いよ。

さくら
オジサンみたいな人のことを言ったのね。

男
え？

さくら
オジサンさ、すみれさんて人のこと、可愛いそうだって思ったでしょう。それはさ、惚れたってことなのよ。

男
すごいこと言うね。

さくら
そーお？

男
・・・じゃあさ、おねえちゃんも、いつかオジサンみたいな人になるんだ。

さくら
何故？

男
だっていつか・・・おねえちゃんだって、人のこと可愛いそうって思う時がくるでしょう。恋・・・するでしょう？

さくら
恋！？・・・(急に顔を赤らめて)やだ。いやらしいっ。

男
・・・やっぱ、あんましわかってないな・・・。

さくら
(ムクれる)

男
そうか。おねえちゃんは、女の子だから、やっぱり、惚れるよか、惚れられるほうがいいな。可愛いそうだって

思われるほうがいいよな、女は。

さくら どうして、あたしがかわいそうなの？

男 え？・・・だって・・・例えばだよ・・・おねえちゃんのことを、本当は、いっとう大事に思ってる男がいたとするよな。で、そいつが、ひよっこり現れたとするな。

さくら ええ。

男 ところが、その男は、どうしようもない男でね、おねえちゃんはそいつのせいで、苦労したり、恥ずかしい思いをしたりするハメになっちまったとする。どうだい、かわいそうじゃないか、おねえちゃんは。

さくら うーん。(考え込む)

男 (呟く) どうだどうだ。

さくら そうねえ・・・。

男 そうすつとだ、そういうおねえちゃんのことをだな、最初は、かわいそうだって思ってたくせに、そのうちホレちゃったりするフトドキもんが出てくる！

さくら ええ？

男 いや、出てくる。絶対でてくる！ いるんだよ、このあたりには、そーゆーのがゾロゾロ。くそお、フテーやろうだ！

さくら ・・なに言ってるの？

男 へ？・・・。

さくら オジサンってかわってる・・・ふふふ・・・あ、麦茶のみます？(ト、立ち上がり奥へ)

男

いや、あの・・・おいとまします・・・けど・・・。

さくら

(奥から)・・・でもね、オジサン。そんなへんな男の人が来たら、あたしもかわいそうかもしれないけど、そのぐうたらな男の人のほうが、もっとかわいそかない？

男

え・・・。

さくら

だって、その人、あたしのこといっとう大事って思ってくれてるんでしょう。それなのに、あたしに迷惑ばかりかけちゃうなんて・・・。

男

・・・そんなこと・・・そんなこと言うなよ・・・さくら・・・。

さくら

そうだ。ねえ、もし、そんなことになったら、あたし、ねえ、オジサン、あたしき、その人にちっとも迷惑なんかかけてないよって、そう言ってあげる。それで、その人のこと好きに・・・。

男、カバンを持ち、そっと中庭のほうから消える。

さくら

(麦茶をもって出てきて) あら？・・・オジサン？・・・
(月の石をそっと手にとる)

明かり、おちる。

蝉の声。明かり入ると、男、カバンに腰掛けて、ハガキを書いている。

男

(ハガキ読む)“拝啓。さくら様。先日は突然おじやまをいたしました失礼をいたしました。あなたがわたしにくださった一杯の水は、砂漠のオアシスのごとく・・・”

かまえずぎだなあ・・・(耳から、鉛筆を出して消し、書く)“拝啓。さくら様。美しく育ったお前の姿を見て、兄さんは・・・”突然兄さんなんて書いたら、たまげちゃうよなあ。(消す)えーと、“拝啓。さくら様。先日はありがとうございます。また、何時の日か望郷の思いたちがたく不詳の兄が帰郷し折は・・・”いや、違うな。“何時の日にか、立派な男となって、あなたの前に再び現れる日を夢見・・・”(溜め息。消す)“拝啓。さくら様。先日はありがとうございます。実は、あなたにお詫びをしなければなりません。先日あなたに差し上げたあの石は、本当は月の石なんかではなくただの軽石です。だから、おばちゃんにでもやってください。わたしが、こんなことを言うのはおかしいですが人の言うことを、頭っから、信じてはなりません。月の石なんてありっこないのです。勘弁されまし。旅の空より・・・(フト、手をとめ、ふうふうっと溜め息)・・・やっぱ・・・やめとこ・・・。(ト、やぶる)

明かり、すんとおち・

(ナショナルCFソング ♪あつかいナショナル♪)

〔七〕昭和四十四年・夏（夜）

アポロ十一号発射準備の放送、聞こえてくる。

昭和四十四年七月十六日（水）の日めくりに照り入る。

明かりひろがると、店はだいぶ様がわりしている。

店の一角には、テレビ（後向き）があり、空き地だった

中庭には、裏の“アサヒ印刷”の工場が見える。

店のテーブルで、さくら（二十二歳）がうつぶして眠っている。

奥の台所の方から、ガタガタと洗濯機の音がして、ガタ
ンツと止まる。

さくら、目を醒ます。

さくら

（奥を見て）あ、とまった。（テレビを見て）あッ、も
うすぐとぶわッ。

さくら、奥の座敷で寝てる（らしい）おじちゃん達の方
へ

さくら

おじちゃんッ、おばちゃんッ、アポロがとぶわよッ。

返事なし。

さくら、テレビを気にしながら、台所の方へ、いったん

消え、洗濯物と籠をかかえて出てくる。

そして、テレビを見ながら、洗濯物を一枚一枚、パンパ
ンツと叩きながら、たたんで籠に入れる。

さくら

ああ、どきどきしちゃう。・・おじちゃんツ、起きてっ
たらッ。・・もウツ。ちゃんとおこしたわよ。嫌よ、
あとで、文句言ったりしないだよ。

“　・・・天候は、気温三十度、微風。雲はややあるもの
の、打ち上げにはさしつかえないと予報されています。
視界は、十六キロ。・・”

さくら

ああ、いよいよだわあ。・・。

中庭から、博やって来る。

博

アポロ、どうしました？

さくら

あ、博さん。もうすぐもうすぐ。(ト、手まねきする)

博は、シャツとズボン、腕にカバーをした仕事着姿で、
ちよつと頭を下げた入ってくる。

さくら

はい。(ト、椅子をすすめる)

博

どうも。(座る)

さくら 博さん、こんな時間まで残業してたんですか？

博 え？ あ、はい。これ、見たかったから。なにかしてないと、寝ちやうから。・・さくらさん、洗濯してたんですか？

さくら ええ。これ見たかったから。なにかしてないと寝ちやうから。・・あ、やだ。おんなしこといっちゃって。

博 いや、いいんです。あはは・・。

二人、ぎこちなくテレビを見る。

さくら とびそうで、とばないんですね。

博 なんてったって、月ですから。

さくら あ、お茶入れますね。(ト、奥へ)

博 あ、おかまいなく。あの、見せていただいでるだけで・
・・。すみません、さくらさん・・・。(じつと奥を見つめる愛に満ちたまなざし)

さくら、麦茶を持って出てくる。

さくら どうぞ。

博 すいません。(飲んで)・・うまいなあ・・。

さくら やだ・・。ただの麦茶なのに。

博 いえ、うまいです。

もじもじする二人。

さくら あ・・あの・・ビール、飲みます？

博 え？・・い、いや、だめです。アルコールなんて・・。

さくら でも、もう、お仕事おわたたんでしょ？

博 はい・・でもッ、だめです。仕事はおわりました。で

も、さくらさんと二人っきりで、お酒を飲むなんて・・

僕は、そんなふまじめな男じゃありませんッ。

さくら そ・・そんな意味じゃ・・。(ト、ちよつと、うんざ

りする) 麦茶、どうぞ。

博 はい・・。(ハツとして) あ、す、すいません。あ、

あの、うんざりしないでくださいッ。

さくら はい。しません。

博 ほんとですね・・ぼ、ぼくは、その・・さくらさん・

・・。

アポロ放送“・・5、4、3・・”

はっと、テレビを見る二人。

発射！

さくら・博 うおおーッ！

博 や、やりましたね、ついにやりましたねッ。

さくら すごいッ、すごいわッ。

二人、手をにぎりあって興奮する。

博 ?

さくら え？（ト、手をひらくと、いつの間にか“月の石”を握っていた）

博 なんですか、これ・・・さくらさん・・・？

さくら ・ ・ ・ どうして、こんなものが・・・。あ・・・これ・・・
あたしが中学に入ったばかりの夏休みに・・・月の石
・・・。

博 月の石？ 軽石に見えるけど・・・。

さくら ううん、月の石なの・・・。そう言ってた・・・。

博 誰が？

さくら これをくれた人・・・。

博 え・・・。

さくら おもしろい人だったわ・・・ちょっとさみしそうで、
も、さみしいって人には思われたくないみたい人で・
・・・。

博 さくらさん！

さくら はい？

博 そ、そ、そういう人がいるんなら、なんで、そう言って
くれないんです。そ、そんなら、ぼ、ぼくはッ。

さくら 帰っちゃったのよ。

博 へ？

さくら 帰っちゃったの・・・。

博

はい？

さくら

そうなの。麦茶出さなかったら、帰っちゃったの。

博

・・麦茶を？・・出さなかった？・・帰っちゃった？・

・・ははは、なんだ、帰っちゃったのか。なーんだ。わ

っはっはっ。(ト、威張って麦茶を飲む)・・それ、軽

石ですよ、ただの。

さくら

・・・。

博

(テレビをみながら、なんとなく態度でかくなってる)

しかし、なんだね、人類も月になんか行っちゃって、ほ

んとに、もー、どうする気かねえ。

さくら

(石をじっと見つめて)・・月の石・・。

博

(ちらっと見て) 軽石。(テレビを指して) 今、出発し

だばっかだもん。ここにあるわけないんですよ、そんな

もん。けど、悪いやつだよね、そいつ。さくらさんのこ

と騙したんだよな。きつと、そいつ、アレですよ、その

あと不幸になってますよ。だって、純情なさくらさんを

騙したんだもの。ツキが落ちたって。ツキの石落ちる・

・・なんつって・・我ながら、ぜんぜんおもしろくない

な。わっはっはっは。

ト、外が、にわか騒がしくなる。

さくら&博

・・・？(顔を見合わせる)

ト、外から声・・・

“よし、皆な、元気だったかい？”

“お、お前、ひよつとして・・・”

“覚えててくれたかい？”

“お、おーい、大変だあつ”

“なんだよお、大袈裟だねー。たまに、生まれ故郷に、
帰ってきたくらいで”

“たまつて、おめえ、何十年ぶりよお”

“さくらちゃん、さくらちゃん、大変だあーッ”

“兄キだよおつ” 兄キが帰ってきやがったよおつ”

さくら

え？・・・

博

・・・(麦茶を手にしたまま、表に面した戸を開ける)

さくら

・・・お兄ちゃんってあたしに？・・・だれ・・・？

さくらと博、表を覗き込む。

アポロ放送、大きくなる。

(M“グッナイト・ベイビー”↓in)

ト、中庭にシルエット・・・。

帽子をかぶつて、カバンを下げた男の姿である。

男、“よっ”と言うように、ちよつと手をあげる。

アポロ放送、大きくなって・・・。

前方を見つめつづけるさくらと博・・・。

幕